

総合診療室（総診）を経験して

臨床研修を開始して

歯科総合診療部 研修医 上村 藍太郎



新潟大学に入学してから、一歩ずつ歯科医師に近づいていったと思います。私たち新潟大学出身の研修医は、病院で患者様と接する多くの機会がありました。まずは、学部最終学年

での臨床実習、さらに遡れば、早期臨床実習でも患者様と接することができました。早期臨床実習は1、2年生で行われました。その頃の私が何を考えていたか、正直なところよく覚えていません。当時の6年生に診療してもらいながら、あるいは専門診療室の診療を見学しながら、何となく将来の自分と重ねていました。その後は学部で実習と試験に追われて、気が付けば登院。目の前のことをこなすのが精一杯でした。

臨床研修を行なっている今、学生時代の臨床実習を振り返ってみて、学生時代のときより心の余裕があると感じています。やったことがある、見たことがある、といったことが心の余裕につながっているのだと思います。学生時代には、様々な診療分野を経験することができました。研修医となった今、治療計画や治療手順を考えるときに脳裏をよぎるのは、学生時代のライターの言葉や自分の失敗の経験です。そういった学生時代の経験をもとに日々の診療を組み立てることができそうです。学生時代に苦労して技工物をつくったことも、貴重な経験だったと思います。クラウンや義歯を最後まで製作することで、補綴物の形態の意味を学ぶことができました。補綴物の作り方は教科書に書いてありますが、理想的な形態はどういったものか、あるいはその形態であることの意味については、自分で製作しなければ理解できないと思います。また技工物を自分でつくることで、各診

療ステップの意義や重要性が分かってきたと思います。技工物と合わせて、学生時代に追われていたのは、レポートでした。何回も先生のご指導を頂きながら、書き直したことを覚えています。学生のときは、なぜこのようなことまで書かなくてはならないのか、なぜこのようなことにこだわるのか、と思っていました。しかし今思えば、ひとつひとつを丁寧に書くことで、診断の手順や、処置中、処置後に確認するべきことを学ぶことができました。

歯科医師免許を手にして、責任を実感しながら充実した日々を送っています。総合診療部では、保存処置、補綴処置から外科処置まで、様々な治療を経験することができます。歯を保存するにはどうすればよいか、失った機能を回復するにはどうすればよいか、といったことを網羅的に学ぶことができます。このような多くの分野にわたる診療を、保存、補綴各分野の専門の指導医に指導を受けながら診療を進めることができます。各分野の専門の先生方に指導を受けることのできる環境はとても恵まれたものだと思います。鮮やかな手技、自分にはない着眼点を学ぶことができます。また総合診療部では、先生方の診療を見学することで、自分が経験したことのない症例を知ることができます。見学を通して、よりよい治療、より効率的な治療を学ぶことができますし、また患者様に提示できる治療の選択肢を広げることができます。様々な症例に向き合いながら、ベテランの先生方に学びながら、歯科医師としてのキャリアの土台を作っていきたいと思います。

研修医となって総合診療部で診療を行うようになってから、患者様からは「先生」と呼ばれるようになります。総合診療部では、担当の研修医が主治医として治療を行います。「よくなった」、そして「ありがとう」の言葉を頂くと、学生時代に何となく見ていた先生に近づいたように感じます。「先生」と呼ばれるにふさわしい診療をしているか、常に考えていきたいと思います。

総合診療部を経験して

歯科総合診療部 研修医 松田由実

歯科総合診療部での卒後研修が始まり4ヶ月が過ぎようとしています。学生時代の臨床実習とはまた違う緊張感のある毎日で、日々の診療に追われながらあっという間に過ぎていったように思います。それでも4月の自分と比べると、少しですが成長できているという実感もあり、充実した日々を過ごせていると感じています。今回、総合診療部を経験するというテーマの原稿を書かせて頂くことになり、学生時代の臨床実習から現在に至るまでの総合診療部での日々を振り返ってみたいと思います。

総合診療部での臨床実習は5年生の秋から始まりました。初めての患者様と触れ合う機会に、期待と不安でいっぱいだったことを覚えています。初めのうちは、診療の手技だけでなく、患者様とのコミュニケーションの取り方や総診のしくみ、カルテの打ち方など分からないことだらけで、戸惑うことが多くありました。その度に、指導医の先生方が私達を暖かく、厳しく導いてくださいました。また、患者様からの診療後の「ありがとうございました」という言葉が、とても嬉しくありがたい気持ちになると同時に、もっと頑張らなくてはという励みになりました。当たり前のことですが、配当される患者様の状態は1人として同じものではなく、それまで模型相手の実習の経験しかなかった当時の私にとって、毎回の診療での患者様や先生方とのやり取りで得るものはとても多く、患者様に育ててもらった1年間だったと思います。

卒後研修が始まり、改めて臨床実習は本当に貴重な経験で、恵まれた環境だったということを実感しています。それは単に診療の手技が分かるということだけではなく、診療に臨む基本的な態度が習慣となって身についていると感じるからです。このような機会を下さった、患者様や先生方

には感謝の気持ちでいっぱいですし、この経験を無駄にしないように頑張らなくてはいけないと思っています。

私は現在、総合診療部で1年間研修を行うプログラムに所属しています。ここでは、配当された患者様の治療に加えて、指導医の先生、ペアの研修医の診療介助、初診の患者様への対応、その他の係業務などを中心に研修を行っています。臨床実習との最も大きな違いは、配当された患者様の主治医が自分であることです。指導医の先生にアドバイスを頂きながらも、最終的な判断は主治医である私達が下すことになり、これまでよりも責任感を持って考えながら診療をするようになりました。更に、臨床実習ではそれぞれの処置にたっぷり時間を掛けていましたが、限られた時間の中で患者様により満足して頂くにはどうすればいいかを考えるようになりました。自分の診療だけでなく、指導医の先生方の診療介助は沢山の発見があり、とても勉強になります。また、治療は基本的にペアの研修医が介助に付き行われますが、自分の症例に加えてペアの症例でも同じく学ぶことがあり、より多くの経験ができています。

私がこの研修プログラムで一番よかったと思うのは、1人の患者様に対して治療方針、治療計画の立案から、それに沿った全ての治療を一貫して自分の手で行うことが出来る点です。初診での診査から、一口腔単位で治療が進められ、症例によってはその予後までを自分で見る事ができます。また、それぞれのステップで専門的な知識を持った指導医の先生が丁寧に指導して下さり、診療の中での疑問点などにも答えてくださいます。毎回の診療を自分なりに納得しながら進めることが出来るので、日々成長を実感することができています。

学生時代の臨床実習から始まった総合診療部での日々も、残り8ヶ月程となりました。この恵まれた環境を最大限に活かせるように、残りの日々を大切に過ごしていきたいと思います。